

上田西高の教育

グリーンアリーナ



「進化」

第 55 号 2011.3 発行

50 周年記念特集

五十年の歩みと未来	佐々木清司……………2	「千西一遇」と平成 22 年度 新聞委員会の活動	池田香織・宮坂正議……9
五十周年記念行事を終えて	村松 憲治……………3	初の全国大会出場へ	原 公彦……………11
修学旅行総括	和田 弘実……………4	充実した国際教育	山口 裕恵……………12
初担任を終えて	清水 直……………7	進路指導の取り組み	……………15
		編集後記	……………18

上田西高等学校

五十年の歩みと未来

理事長 佐々木 清 司

五十年の歴史から学ぶもの

本校は本年度創立五十年を迎え、過日十月二十三日記念式典を終えた。この五十年を振り返る時、学校を創るといふことは膨大なエネルギーを要したことを改めて感じる。高度経済成長下で高校応募者が急増、これに因應するために公立高校設立が望まれたが、それが不可能となり、地域の教育を創出するために私立高校設立を掲げ、上田学園が短期間の準備期間で開校するという厳しい条件を一つひとつ乗り越え、これを実現したことだ。元上田市長であり初代学園理事長の水野鼎藏先生の教育愛、郷土愛と学校を創る上田市民の大きな支援がエネルギーとなつて、学校設立が現実のものとなった。上田学園関係者はこの創立の膨大な学校設立のエネルギーを認識し、次代に継いでいかねばならない。

この五十年間に本校の卒業生は一万三〇〇〇名を数えた。開校当時は地元企業が少ない首都圏へ出る者もあつたが、高度経済成長期に地元企業の雇用も多くなり、卒業生の多くは地元に残つた。現在地元企業の中堅として企業や地域社会を背負っている層は本学園の卒業生が多い。その意味において地域の人材育成に十分貢献してきているし、今後もこの方針は変わることはない。

上田学園には創立以来の建学の精神があり、一貫して全人教育を基調とする人づくりの大切さと取り組んできた。校訓にある自主性・社会性の確立とともに質実剛健・明朗闊達な人間形成は地域社会からも大きな期待をもって受け入れられてきた。普通科



創立時の上田城南高校（昭和40年）

高校では私学教育の特色を活かしたコース制や類型制、生徒会活動や部活動を高校生活に生かし、生徒一人ひとりをしっかりと把握する教育を展開し、進路指導に生かしてきている。本校の教育の特色もこうしたところにある。

西高の未来

学校はその存立する地域の教育力向上を担っている。これからの本校の教育の軸は日本や世界また



創立50周年を迎えた上田西高校（平成22年）

地域社会を背負って立つ人材育成にある。社会の動向や地域社会の要望をしっかりと受け止め、上田の地で責任を持って生徒を育てることが、地域教育力を高めることに繋がると確信して西高教育を更に進化していかなければならない。

現代社会を生き抜くには多彩な力が求められている。学校としてたくましい力を作るとともに広い視野での見方や行動力をつくらねばならない。文武両道に切磋琢磨し心身を鍛える校風の更なる育成が必要である。私学としての力強い教育づくりが今求められている。

五十周年記念行事を終えて

学校長 村松憲治

記念行事の準備は平成二十年の五十周年記念事業実行委員会の結成までさかのぼる。その中の総務式典委員会が計画、立案、準備を担当した。本格的には平成二十二年度に入り、記念式典の次第、招待者の選定、係分担等を決定し、実行委員会にはかかっていった。

案内状発送や参加者への記念品の準備、信濃毎日新聞に掲載する全面新聞広告や式典で上映するビデオの作成などが行われ、中でも五十周年記念誌は約三年越しの作業であった。

国際的な賓客、姉妹校のセントラルコースト・グラマーズスクールや天津二中の各三名の一行は前日までに来日しており、当日も茶道による接待を受けた。それ以外の参加者も当日の早い時間から参集し始め、各控え室に入った。阿部守一長野県知事や羽田雄一郎参議院議員、母袋創一上田市長など各界の名士の参加が実現したことは本校にとって名譽なことであった。とくに県知事の直々の出席は式典に花を添えた。

受付で配られたのは、式典パンフレット、記念品(時計)、記念誌、来賓名簿広告の掲載された新聞等で、手提げ袋に入れ配布された。生徒にはペンセットが配布された。

記念式典は、西高体育館において千名を越す参加者で挙行された。勇壮な西高太鼓演奏を皮切りに、

国歌斉唱、物故者追悼の後、理事長が式辞を述べた。更に実行委員長挨拶、阿部県知事、羽田参議院議員、母袋市長、猪熊啓司私立中高協会長の来賓挨拶、来賓紹介、祝電披露、生徒代表の挨拶、感謝状贈呈、学校長の謝辞と進み、校歌斉唱で滞りなく終了した。生徒の参加態度も立派であり、全体として五十周年を締め括る厳粛な式典となった。

終了後、本校同窓生でプロボクサーの西沢ヨシノリ氏の「ネバー・セイ・キャン」と題した約一時間には渡る講演があり、聴衆は感動的な話に聞き入った。

講演の終了後、場所を東急インに移し、記念祝賀会が行われた。ここでは、理事長挨拶の後、島田基正県会議員、セントラルコースト・グラマーズスクールのロー校長と天津二中の陳校長の挨拶と贈呈される立派な記念品の披露が場を盛り上げ、更に、本校の生徒会に二十六年間に渡って太鼓演奏の指導をしてきた青木義民太鼓の宮人貞嘉、幸子夫妻と、応援歌「西高カーニバル」を献呈された塩川勝昭氏への感謝状贈呈も行われた。アトラクションではチアリーダー部の「西高カーニバル」の演技や弦楽合奏も行われ、二百名を超える参加者の祝賀の雰囲気大いに盛り上がった。

一連の記念行事は多くの方々の方々の尽力で、五十年の節目に相応しく実施できたといえよう。



修学旅行総括

2 学年主任 和田 弘 実

I、修学旅行目的について

① 国際交流

・ 文通、ポスター作成によるカフク高校へのグループ紹介等事前学習においてジョセフ先生の協力を得て、非常にありがたかった。相手高校との事前打ち合わせは、業者が介入することでコミュニケーションが取れず、当日混乱をきたす面があったが、今回直接カフク高校とスケジュールの打ち合わせが可能だったため、当日の運営がスムーズかつ和やかに展開された。

・ カフク高校はポリネシア文化センターに関係が深く、モルモン教の影響もあり生徒の雰囲気フレンドリーであった。文化交流では歓迎セレモニーに始まりカフク高校より、ハワイ・ポリネシア・サモアのダンス発表。西高からは丹羽先生と剣道部員によるパフォーマンス・女子有志によるダンス・日舞・竹内先生とカフク高校生徒のフラダンス等盛り沢山であり、たいへん盛り上がった。その後は各グループ交流となり、校内ツアー・写真撮影・お土産交換と進み、昼食はカフェテリアにてグループ毎で摂あたりから、生徒間の雰囲気明るくなる。カフク高校との別れの場面では、アドレスを交換する者、女子生徒にハグされ照れる男子等様々な姿が印象的な場面であった。口々に英語がもつと話せればと

いう生徒の感想が象徴的でもある。

・ 今回の学校交流は全体的には大きな成果を収めたと感じるが、今後生徒の意識に残り、継続的に発展できる環境も必要である。

② 平和・歴史学習

・ 事前学習はジョセフ先生による「アメリカからみた真珠湾攻撃」「対馬丸」「西高祭での学年学習係による展示」、学年内での各クラス代表者によるハワイの文化・歴史・戦争の調べ学習発表など実施し、生徒の認識を深めることができた。

・ アリゾナ記念館の映画は以前小映画館であったが、現在は屋外のテント風で上映されていた。明るい会場でもあり、寝れる雰囲気ではなく、ほとんど生徒が寝るという状態ではなかった。ただ英語のみの説明であり内容が深いだけに残念であった。

・ アリゾナ記念館見学は生徒の態度に心配したが、前回の生徒と比較しても移動の乗船から見学態度・黙祷する数名の生徒の姿からも感心させられた。余談ではあるが、ガイドさんの話では現在一番マナーが悪いのは中国人であるとのことであった。

・ 戦艦ミズーリは改装され、興味を持って見学する生徒が多かった。各クラスにガイドが付き丁寧な説明であった。特に第二次世界大戦におけるミズーリ船の残る特攻隊の傷は悲惨さを物語っており印象深い。艦上において平

和セレモニーが実施され、平和宣言・黙祷・千羽鶴贈呈と進み、最後館長よりお礼と戦争に対する言葉を拝聴でき、非常にありがたかった。

・ 平和講演会は Ronald Oba 氏による「氏の体験した真珠湾と 442 部隊」の講演であった。質疑では数名の生徒が氏に対し戦争の悲惨さを質問するなど、有意義な時間となった。

③ 文化・自然体験

・ 到着日希望者によるワイキキビーチ見学は多くの生徒が参加し好評であった。夕日のサンセットは幻想的であり、海辺ではしゃぐ者・記念写真・大会が近いためランニングする陸



上部員・おもわず海で泳ぐ者・浜辺でスパーリングするレスリング部員等二時間弱という時間ではあったが満喫できた。

・到着日地元スーパーマーケットの買い物を入れたが、生徒の評判は非常によかった。安さ・物の大きさ・単位の違い・初めてみる商品の数々は生徒の好奇心に刺激的であり、時間が足りないとの不満が多かった。他国文化を知るうえでにおいても貴重な体験になったようである。

・四日目はクラス別行動であり、ハワイの文化・自然を満喫した。クアロア牧場見学・潜水艦・シークレットアイランドビーチでの遊泳・マリンスポーツ（ジェットスキー・スキューバー体験・バナナボート・シユノーケリング）パンチボール見学・チャイナガーデン等各クラス満足感があつたようである。

・四日目最終は全クラスアラモアナショッピングセンターにて買い物であった。ここ数年で規模が更に拡大され、生徒もとまどつたようであるがほぼ時間は守られた。近年の生徒は以前のようなブランド志向が薄れ、堅実な買い物であり、高価な買い物を必要としない傾向にあるようである。

・ポリネシア文化センターはポリネシア全体の歴史と文化に触れることができ生徒にも好評であった。

・ドール園ではガイドの紹介もあり、パイナップル関連の商品を多く買う姿があつた。味もよく堪能した様子であつた。

・ハワイは気候的には湿気がなく、日陰に入る

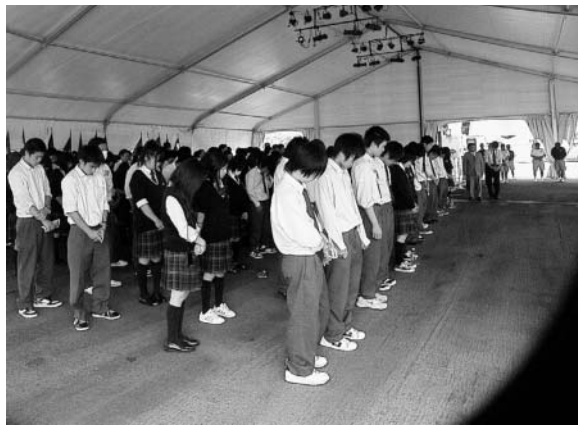
と涼しいほですごしやすかつた。ホテル内においても就寝時エアコンを切つてある部屋が多く。さほど暑さは感じない。ただ、紫外線が強いため日中は日焼けに注意したい。

④ 自主活動

・本年度R長会は非常に心配されたが、旅行中献身的に頑張っている姿があり、一定の評価ができる内容であつた。

・当初自主規律決定に時間を要したが、担当の先生が地道に指導し本人たちの自覚を促し、リーダーとしての役割を果たさすことができた。

・リーダー組織の発展という面では課題が残つ



II、全体の行程について

① 一日目

・集合時間には10分前に全員集合し、定刻に出発できた。

・機内食は量が少なく男子にとっては不満足なものであつた。また、同時に朝食用のパン一個配布であつたが、付随したものと勘違いし食べる生徒が多数いた。到着後平和学習終了後の昼食が二時近くなるクラスもあり、空腹を訴える者が出た。時差を鑑みても到着後早めにランチを摂るべきであつた。

・入国に関してはやはり時間を要し、予定時刻をオーバーした。

・飛行機内は比較的静かであり、夕食後直ちに睡眠に入る生徒が多かつた。

・パールカントリークラブの昼食は景色、雰囲気もよく、また、食事内容も生徒にはほぼ好評のようであつた。

・平和学習は予定通り実現できた。生徒も初日であり緊張感があつたことも要因であるが比較的穏やかに進めた。ただ、時差もあり昼食までは強行軍である。ホテルに早めに入れることができ部屋で休む生徒もいた。

② 二日目

・カフク高校と交流会に向け、担当職員・文化

交流ステージに参加する生徒は早めに出発し、準備を整えておいた。結果全体スタートが非常にスムーズに始まりありがたかった。生徒にとっても到着後直ちに各グループにわかれ歓迎セレモニーに参加でき、混乱することなく交流会が進めた。

・カフク高校側の参加生徒は前回より多数おり、学校全体の歓迎ムードであった。また、日本語の授業を受講している生徒も多く、積極的に日本語で対応する姿がみられた。

・ポリネシア文化センターは全体が楽しめたようであるが、時間が短くポリネシアンショーをゆっくり堪能できなかった。生徒の動きも慌ただしく、一時間余裕があればと感じた。

②
・ドール園は好評であった。
・前原大臣とヒラリー氏の会談がプリンスホテルであり、ホテル到着時間を10分ほど遅らされた。(警備の関係上)

③
三日目
・クラス別行動日であった。二名が体調不良によりホテルで休養させる。

・自然・文化を堪能し、生徒の顔も満足感で溢れたようである。

④
四日目・五日目

・ホテル発、見学、出国までスムーズであった。
・台風の影響で到着地が成田から中部国際他に変更も懸念されたが、定刻より早めに無事成田着となった。また、後発の5組も到着が大幅に早まった。結果学校着が予定時刻内におさまった。

Ⅲ、係総括

◎学習係総括

1. 事前学習

ア. 西高祭修学旅行展示

・学習係を中心に各クラスにテーマを割り振り、模造紙にまとめた。全体として生徒の取り組みは良好で、テーマを限定したことがブレゼンキヤラバンの前学習として機能した。

イ. 平和講演

・AETのジョセフに、「アメリカから見た真珠湾攻撃」というタイトルで平和講演を実施していただいた。身近なアメリカ人から太平洋戦争の話聞き、生徒たちには真剣に考えさせることができた。また、昨年に引き続き、映画『対馬丸』を鑑賞した。真珠湾攻撃とは直接関係のない映画ではあったが、太平洋戦争の悲惨さを考えさせるにはよい映画であった。

ウ. ブレゼンキヤラバン

・昨年度の取り組みを踏襲して数学科・国語科・社会科にご協力いただき、全体としてスムーズに進んだ。

・各クラス代表になった生徒は、1週間各クラスを回り、自分たちの成果を発表することができた。

・時間的な制約や、クラスによつてのモチベーションの差が現れてきているような気もする。次年度以降は別の方法を模索する必要があるのではないか。

2. 事後学習

・「旅行記」を作成。

・旅行中の平和講演の記録を活字に起こす予定である。

◎保健係

・けが人、病人が少なくて良かった。

・3日目に偏頭痛と発熱で男女1名ずつクラス別体験に参加できない生徒がいたが、それぞれ夕方のショッピングからクラスに戻ることもできた。(ホテル待機の生徒が出た場合の昼食等の手配も考慮しておいた方が良かった)

◎ルーム長会係

1. 自主規律の作成と運用

・自主規律の作成において、当初はこまごまとルールを考えていった。しかし、途中で自主規律の意義を問い、今年のルーム長会としてはどういった修学旅行にしていきたいのかを考えさせた。結果、諸注意やマナーをしっかりと守るということになり、しおりに載せるものは非常にシンプルなものとなったが、自主規律の意義としては一定の成果があった。

・学年集会やクラスでの呼びかけなどで、徹底を図ってきた。大きな指導もなく、完璧とはいかないがそれなりに運用はできた。

2. 企画の計画と実行

・交流会における校歌は、多くの先生方のご協力もあり、まずまず声は出ていた。
・交流会における校歌も含め、企画全体的に計画部分に甘さがあり当日にバタバタする

ところがあった。

3. リーダーの育成

- ・ルーム長会の開催、運営を含め、ルーム長会自体に自発的なものを植えつけるまでには至らなかった。修学旅行前の時期だけに限らず、発足からの流れが大切であり、反省する点も多い。

- ・今年のメンバーには、部活動を熱心に行っているメンバーが多かったこともあるが、I類、II類の終業時間の違いもあり、放課後の開催は生徒も大変そうであった。この点が解消されれば、ルーム長会も活発になりリーダーの育成もよりし易く、より良いものになると思われる。

IV、全体を通して

- ・ホテルが一般的にはデラックスタイプであり、対応・セキュリティも含め非常に過ごしやすかった。食事内容もよく、特に各クラス一日使用したプリンススコートの食事は豪華であった。(生徒アンケートにも顕著に表れている)

- ・費用が当初15万円以内と計画したが、見積もり時と比較し生徒数が減となり二千円程度オーバーとなった。

- ・クラブの大会が重ならず、長欠・本人及び家庭事情による不参加者が7名におさまった点は、ほぼ全員参加となりよかった。

- ・ポスター形式の文通については、一回目がカフク高校の夏休みの関係で忙しくなってしまった。内容については、班で工夫して作成し、多少英

語を使用できたのはよかった。また、廊下へ張り出し盛り上げられた。

- ・交流会準備は副班長を中心に、交流会セレモニーの有志ダンスなど積極的に交流計画が立てられ実行できた。また、学年ののびのびした雰囲気を活かしたグループ交流計画が立てられ実践できた。

- ・ホテル内では生徒のマナーに問題はなく、最終日には給支配人より食事時間の正確さと、館内でのマナーについてお褒めの言葉をいただいた。日程的にはハードであるが、生徒のアンケート結果をみても非常に満足感があり、全体的に有意義な旅行となった。



初担任を終えて

清水 直

県内の公立高校で5年間勤めたあと、私が上田西高校に来たのが今から5年前になる。着任当初、私学独特の教育観や西高ならではの慣習、雰囲気などを様々な場面で感じ、驚いたり新鮮に思ったりしたものだった。今となっては、そういったことにも随分と慣れてしまいいろんなことが当たり前のようになってしまっているが、この3年間の担任生活を振り返り、担任という立場からあらためて感じた西高の教育について、考えてみたいと思う。

西高に来て最初に驚いた出来事は、強歩大会後の焼き肉会である。中庭やその周辺に所狭しと並べられた焼き肉セットと、それを取り巻く保護者の数に圧倒され、あれはもはやカルチャーショックと言ってもいい出来事だった。ほぼ全クラス一斉に行われる焼き肉大会など、なかなか他校にはないイベントであるが、そこに関わる保護者の数の多さも、高校のPTAの活動としてはかなりのものだと思った。また、学級PTAの懇親会や卒業祝賀会での余興など、様々なPTA活動を通して、学校と保護者との関わりの深さを強く感じた。

2年目には、1年生のクラスの副担任を務めさせてもらったのだが、これが担任を持つ準備として本当に大きな意味を持つ1年間となった。このクラスは本当にたくさん保護者が毎回の行事やイベントに参加していた。これは担任の先生の信念、情熱の下、日々費やされた努力によるものだ。毎日出され

る学級通信（これもよその高校ではなかなかお目にかかれない）、手厚い家庭連絡等、そういった日々の積み重ねが保護者の学校へ対する大きな信頼となり、多くの保護者が学校行事や懇親会に集まってくれたのだろう。学校（教師）と家庭（保護者）の関係を密にし、信頼関係を築き、協力して生徒を育てていくことが、ことクラス運営においては重要であるということが、身を持って経験することが出来た1年間だった。また、このような教育が多くのリビーターを生み、あるいは評判となって新規の入学者を得ることに繋がるという点は、私学にとっては大変重要なことであると感じた。

とにかく、この1年間で学んだことは大変貴重な



ものであった。何か困ることがあれば、まず1年間ファイルしてきた学級通信を開き、虎の巻として活用させてもらったほどだ。保護者との密接な関係作りが、諸先生方が築き上げてきた西高教育の根本のひとつであるということを認識し、担任を務める際にはクラス運営の基本として常に意識するようにした。保護者に恵まれたということはもちろんだが、3年間お互いに良い関係を築き、円滑にクラスを運営することができたのは、西高の良き伝統のおかげと言えるだろう。

また、3年間、文武両道についても考えさせられた。クラスが3年生になった今年、初めて本格的に進路指導に当たった。I類クラスの生徒のほとんどはAOや推薦入試での受験で、我がクラスでも一般受験をしたのはわずかに2人だけだ。面接や小論文が中心となるため、生徒の進路に対する意識付けや目標設定など、最も根本的な部分の指導が重要になるのだが、その部分が明確でない生徒が多く、一番苦労した点だった。そういった中で、1年次からキャリア教育を取り入れたことには、一定の効果があったと思う。進路について自ら考え、目的意識を持つことを早い時期から定着させることが、I類生徒には最も大切なことだと感じた。授業の中で学力を身につけ、部活動や生徒会活動で社会性を養い、キャリア教育で自分の将来について考える習慣をつけさせることがI類生徒の理想的な文武両道ではないだろうか。休日に全員受験の校外模試も実施されているが、実態を考えればI類のほとんどの生徒にはあまり意味のないものだ。それよりも、その時間を部活動やキャリア教育に当てた方が、実があると言え



る。実際、保護者からも「部活を頑張りたくて西高に来たのに、なぜ休日まで模試を受けなければならぬのか」と言う声を度々いただいた。保護者や生徒が本校に求める文武両道とはどういうものなのか、しっかりと認識して指導に当たる必要があるだろう。

初担任としての3年間は、私に大変多くの知識と経験を与えてくれた。そしてこの3年間で、西高の一員としての自覚を強く、はっきりと持つようになった。時勢や地域社会の中で上田西高校がどうあるべきなのか、良い伝統を受け継ぎつつ、先を見据えながら、教育活動に努めていきたい。

「千西一遇」と

平成二十二年度

新聞委員会の活動

前新聞委員長 池田 香織
顧問 宮坂 正義

新聞作りは、総合的なリテラシーの涵養に役立つ。

取材にはコミュニケーションスキルが要求され、いづどこへ誰に取材するかスケジューリングする力も必要だ。あるいは、我々を取り巻いている日常のなかで、なにか重要なことで、興味を惹くことなのかをつかむための観察力、洞察力、取材した情報を取捨選択し、文章化する力、紙面構成の美的センス、ソフトの特性を理解し使いこなす技術、そして、それぞれの得意スキルを持ったスタッフ同士のチームワーク。さまざまな力が総合されて一つの新聞ができる。二十二年度、池田委員長のもとで「千西一遇」というやや本格的な新聞がスタートしたことは、結果として新聞委員会の活動を本格的な総合学習として捉えなおす機会になった。大きく歴史を動かした池田委員長の活躍は周知のとおりである。そんな池田委員長に委員会活動全般を振り返ってもらった。

宮坂（以下M） 今年も新聞委員会はいろいろやっただけど、どうでした？ 楽しかった？

池田（以下I） そうですね、楽しかったですね。

M 例えませんが？

I 例えば…、新聞作るのに人といっぱい出会えたことかな。色んな人がいて楽しかった。自分とは

違う考えをもっているひとが一杯いて、その人たちの思っていることとか、そういうことは取材しないとわからない。西高祭準備で会長や役員がどう考えてるんだとか、駅の駅員さんがいつも考えてることとか、普通の生活だったら絶対わからなかった話が聴けたと思います。

M 取材活動はとっても活発だった。それだけ『千西一遇』に賭けてた「想い」があったの？

I 始めた頃は自分自身が新聞と向き合ってなかったから、奥深さを知らなくて。でも、先輩たちが作った新聞読むの好きだったからいつも目を通してただけで、当然見えない人もいますよね。どうせなら多くの人に読んでもらおうと思って、カラーで作られてたり、いいところは受け継いだ上で、「新聞」といえば「信毎」とか、朝、家に来る新聞のイメージがあったから、それに近づけたとは思ってた。だから考えは単純で、そんなに深い「想い」があったわけじゃないですよ。

M それって、結構「想い」があったように感じるよ。
I でも、昔の「こころ」とか見ると、「一年のころから新聞委員長をやったかった」とかそういう風に書いている人もいるけど、私はそこまで思ってたかったから。

M たまたまだもんね（笑）。

I ほんと、なにかに引つ張られたように。役員はやりたくなかったの。それは自分とは関係ない世界で。あの時期になると、「私は〇〇委員長やりたい」とか、周りのひとは言い出さじゃないですか。誰がどの委員長に立候補しちゃうってのは大体勝手に決まってるんだ、って客観的に見てた。私はずっと西高祭でスポットライトやりたかった

んです。下に座ってるんじゃないかって、上から見るのって楽しそうだと思う。それで、最後の年から放送委員になろうと思ってるちーちゃん（増尾副委員長のこと）と一緒に手を挙げただけど、ジャンケンで負けちゃって。「わー」って思ったら、余った新聞委員に。ちーちゃんは「副委員長ならいいかな」って言って、「そうか頑張ってる」って思ってた。委員長になりたい人は当然いるんだと思って第一回の委員会にいたら立候補するひとがいなくて「居ないんだ!？」って思った。で、「倫理」でお世話になった宮坂先生がすごく困ってるようにみえたの。それに決まらなくて時間がもったいないから、「じゃあ自分やる」って手をあげた。ちーちゃんが副やりたいって言うたし。

M でもそうやってとにかく新体制がスタートしたよね。最初の新聞は「卒業おめでとう号」。それから四月に出す予定の「入学おめでとう号」の取材も始めた。あの頃一番大変だったことは？

I あの頃は記事の書き方がわかってなかったから、文章はただの適当な作文で、特に大変だと思わなかったんです。文章よりも動くことが大変。写真も撮らなきゃいけないし、新聞の材料を集めるのが大変だった。卒業式の日には三年生の最後のHRに入って行ったのは一番嫌だったなあ。KYなの。三年生はそれぞれ感動的な感じになってるのに、そこにガラガラって入っていくのはKYな感じがして。それに、三年生はまだ私たちがこういう活動やってるって知らないじゃないですか。だから、ずっと廊下で「チキって」た。

M パソコンを駆使した紙面づくりも今年度の目玉



「千西一週 第一号作制中の三役」生徒会室にて

I だったと思うけど、それは苦じゃなかった？

I 苦でしたよ。苦だった苦だった。ローマ字も、私、打てないから、もうそこからですよ。

M でもだいたい打てるようになったよね。練習したの？

I してないです。役員の資料とか作るのにも結局家でパソコン使わなきゃいけなくて、お父さんに指の置く場所とかはちょっとだけ教えてもらったりました。自然とまあまあできるようになったかな。まあ今でもそんな慣れないけど。

M 慣れない作業ばかりだったし、三役がみんな運動部で大変だったと思う。運動部と両立させて良く乗り越えたよね。

I そうそう、大変でした。ほんとうですね。でも、

なんとかなるもんですよ。ただ、部活は、三年生の最後の試合に行けなくて、それは悪いことしたなって思いました。

M 部活終わって、十月には県の総文祭に行った。

I あれには圧倒されました。初めての場だったけど、全然緊張はしませんでした。それよりも初めて他の高校で新聞作ってる人たちに会ったからびっくりした。みんな一年生や二年生なのに堂々と新聞作ってて。

M そこで速報新聞も作ったよね。大変だった？

I 大変でした。走り回って。朝から夜まで新聞作り。新聞作りだけで一日が終わる。そして次の日も朝から新聞作り…。

M 新聞作りの講習会もあった。

I 講習会はもっと早く知れたかったことばかりだったな。見出しの付け方とか写真の撮り方教わって。

M 写真は最初の頃より上手くなったね。

I それまで考えたこともなかったですから。写真の撮り方とか。

M 十二月には信毎にも記事書いたよね。反響はあった？

I いろんな人に「見たよって」言われました。同級生より、先生方に廊下で言われるのが多かったかな。「びっくりした」とかそういう声はいたかったです。それからDプロの子からも「記事見て親子みんなで喜んだ」と言われました。自分たちが「信毎」っていう場をお借りして、そういうことができて、西高以外の人にも伝えられた。だから、例えば、新しい新聞委員会がやってる公民館の企画（上田市西部公民館の市民講座「高校生

と学ぶ新聞おもしろ活用講座」のこと）にもつながったりして、嬉しいです。それから、毎日毎日新聞つくって発行してる新聞社の人々がどれだけすごいかって分かりましたよね。

I とところで、先生は五十嵐先輩の頃に顧問になって、その頃どうだったんですか？ こうしてやろうとか、あったんですか？

M いや、顧問になって、「困ったことになったなあ」って。なにしろ「こころ」が困った。どう編集していいか全然分からなくて。

I 一年たってどうでした？

M 結局一年間は五十嵐さんたちが自分たちで動いてくれたんだけど、僕はほとんど仕事が終わってなくて「悪いことしたな」って思ってたんです。だから、そういうのもあって、一年でやりたい仕事が終わったし、今年は何とかバックアップできるようにしたいっていう気持ちはあったよね。

I そういう感じは出てましたよ。（笑）先生はこの一年間ではどんなことが印象に残ってますか？

M やっぱ、新聞作りのために何度も夜遅くまで生徒会室に「カンヅメ」になったことかな。三人とも紙面にこだわって、仕事のにめり込んでたよね。

I でも、先生ものめり込んでましたよね。（笑）三人じゃ作れなかったんです。先生が色んなところで勉強してきたりして、ひとつ先を行って道を作ってくれたっていうか。ああいうふうに教えてくれて、だから出来たと思いますよ。

M さすがよく分かってる。いいこと言う。（笑）

I これからの新聞委員会はどうですか？ 例えば課題とか。

M ひとつは、記事の中身だと思ふ。形はそれなりになつてゐるから。もつと話題の幅の広い紙面にしなさいいけないし、複数字にわたつてひとつのことに突つ込んでいくような記事もできると思ふ。あともうひとつは、これが大事なんだけど、「組織」の問題かな。

I 「委員会」ですからね。他校は「新聞部」とか「新聞班」ってのが多いですよ。でも関係ないと思ひますよ。私は、西高の「委員会」ってどこもあんまり活発じゃないと思ふんですよ。形だけというか。なにかもつとうまくできないですかね。やっぱり理想を言うと、三役だけじゃなくて、本当はすごく委員全員と作りたかつたんですよ。でもそこまで行かなかつた。難しかつた。だから、ちよつとずつちよつとずつでいいから、例えば一年生が新聞を見て、「あ、楽しそうだな」って、部活みたいに「新聞委員会に入りたい」「写真撮つてほしい」って興味持ってくれる人が増えてつてほしい。その輪が広がつていけば、みんな、委員全員で今回の新聞はどういう紙面にしようとか話し合つて、じゃあ私はこの取材、あなたはこれつて言うように、そういうふうになつてくれればいいと思ふ。

M 「新聞委員会」っていう与えられた条件を最大限生かせるような体制作りが大事だよ。小回りが利くからつて簡単に「新聞部」を作ればいいつてもんじゃないと思ふ。池田さんがこれから新・新聞委員会に期待することは？

I うーん、そうですね、外のひとが「上田西」ときいたら、スポーツとか部活のことを思い浮かべるだけじゃなくて、「新聞委員会頑張つてゐるね」つ

て言われるように、そういう委員会になつてほしいですね。

二月九日、委員会の新体制のもとで「千西一週・第9号」が発行された。創刊の精神は「千西一週」

初の全国大会出場へ

～上田西高校軟式野球部の活動

軟式野球部顧問 原 公彦

長野県の高校軟式野球の歴史は、そのまま松商学園の歴史といつてもよいほどの伝統校である。まさに絶対的な王者として君臨し続けてきた。軟式野球部がある県内の高校は、上田西を含めて10校だが、専用グラウンドや室内練習場、照明施設まで保有しているのは松商学園だけである。他の9校は、近隣の河川敷やグラウンドの片隅で活動している。そういうハンデの中で、「松商学園に勝つ」というのは大きな勲章であると同時に、「松商学園を倒せば全国に行ける」ということでもある。最近20年間で、松商学園が全国出場を果たしたのは15回、残りの5回は今回の上田西高校を含め松商学園を倒した学校が全国大会に出場している。

6年間の通算成績こそほぼ五角ではあるが、強豪松商学園に昨年の夏から苦杯を喫せられてきた。昨夏の北信越大会決勝で2-1で敗れた後は、秋の新人大会でも0-1で完封負け。春の大会では1-7の完敗。かろうじて3位となり、夏の大会は反対側のブロックに入れたが、最後の夏の北信越大会で、松商学園を倒さない限り、全国大会出場はない。追

の題字とともに後輩たちに受け継がれている。この先、西高新聞委員会の活動はどう発展してゆくか。ここに記録されたことを原点に、新たな歴史がまた刻まれてゆくことを新役員に期待したい。

い詰められた状況で、生徒たちは色んな形で努力を続けた。打てないといわれていた打線も、夏前には勝負強い打撃ができるようになったし、ほぼ全員が総てのポジションを経験したことで、一番いい形の守備隊形が生み出された。また、ここ数年間の反省を十分に生かしたコンディション作りや戦術を用いることもできた。北信越大会は組み合わせに恵まれ、前日に松商学園が富山商と消耗戦をしてくれたことや、松商学園のエースが春の大会以降に故障し、本調子ではなかつたという幸運もあった。大会の前日、部長の宮坂先生と話をしたとき、「食事も適切にとつて、夜の自主練も適度にやつているし、ミーティングでも語るべきことがあります。今年はいけるでしょう。」という話をしたが、うまくいくときはすべてがうまくいくものである。当日は素晴らしいコンディ



シオンと雰囲気で試合を優位に進め、4-1で勝利。上田西高校軟式野球部は、創部6年目にして、初の全国大会出場を成し遂げた。6年間という時間は一般的に考えれば異例の早さなのかもしれないが、ここ数年いつも「あと一步」で栄冠を逃してきたことを考えると、試合後の新聞に掲載された「やっと勝てました!!」という言葉が、一番実感のこもった言葉であった。

全国出場が決まってからの20日間はあつという間に過ぎた。練習を重ね、8月25日に兵庫県明石市で開催された全国大会の開会式を迎えた。そこで見たのが、「深紅の大優勝旗」である。地区予選の優勝旗より一回り大きい、まさに「大優勝旗」。これを手に行けるのは1校のみだ。

全国の代表に選ばれた16校だけあつて、どの試合も接戦続きであった。本校も全国大会常連の四国代表新田(愛媛)

と対戦し、終盤まで粘り続けたが、8回に勝ち越され、1-2で初戦敗退となった。新田は決勝まで勝ち進む、素晴らしきチームだった。長かった夏は終わったが、軟式野球部としての歩



みは、確実に一歩ずつ前進させたという充実感が残った。

創部以来、選手・保護者・指導者が「夢」を共有し、ついに夢は現実となった。「何もない」ところから始まった自分たちの活動の原点である河川敷グラウンドを使用させて

いただいている地域の方、日々の活動にさまざまな形で協力していただいている保護者会、大会になるといつもスタンドから暖かい声援をかけてくれるOB、

多くの人の支えと応援があつてこそその結果である。感謝の気持ちを忘れることなく、これからも日々精進していきたいと思う。

新しい目標も生まれた。全国大会で見たあの深紅の大優勝旗を手に入れること。つまり、「全国制覇」。一回り大きな目標に向かって進み始めた軟式野球部を今まで同様、厳しく、そして暖かく見守って欲しい。

平成22年度全国大会出場への道のり

H22.7.19	選手権県ブロック2回戦	○	上田西	12-2	岡谷工	中野市営球場
H22.7.20	選手権県代表決定戦	○	上田西	3-1	松本工	中野市営球場
H22.7.31	選手権北信越大会1回戦	○	上田西	12-1	福井高専(福井1位)	源土運動公園球場
H22.8.1	選手権北信越大会準決勝	○	上田西	7-0	新潟湯川(新潟1位)	源土運動公園球場
H22.8.2	選手権北信越大会決勝	○	上田西	4-1	松商学園(長野1位)	源土運動公園球場
H22.8.25	選手権全国大会1回戦	●	上田西	1-2	新田(四国代表)	兵庫県高砂球場

充実した国際教育

国際教育係 主任 山口 裕恵

―西高における留学生受け入れの現状

今年度の本校国際教育の特徴は、受け入れ留学生の多さと活躍ぶりである。昨秋から冬にかけての三ヶ月間、オーストラリア姉妹校CCGSより計一二名の留学生を受け入れた。期間は高校一年生の子五人が二カ月半、入れ替わりで高校二年生の男女七人が二週間、一カ月半を西高で過ごした。同時期、昨年は八名、一昨年は四名であったので、西高においては、ここ数年のオーストラリアからの受入数の伸びが顕著であるといえる。

視点を日本全体に変えてみると、逆の現象が起きているという点は注目すべきことである。一見、高校生留学の受け入れ件数は微増傾向にあるように見えるが、内訳をみるとアジア(特に中国)からの留学生が主に私立高校で増加しているためであり、オーストラリアからの高校留学は、長期・短期共に、平成八年〜十年を境に減少し続け、この十年でピーク時の半分以下である長期一七〇名、短期八二三名になってしまっている。国は歯止め対策として、「留学生30万人計画」などでも「高校生留学の一層の推進」を提言している。―文部科学省「高等学校等における国際交流等の状況について」資料参照―。社会がグローバル化する中で、まずは英語力補強と云われる現在、派遣留学は英語圏中心なのに対して、英語圏出身の留学生が半減しているという現状に、政府もバランスを取ろうと工夫しているようだ。

総数が半減しているオーストラリア留学生を今年

度、これだけ多く本校に迎えることができたのは大変幸運である。それは姉妹校CCGSとの絆、そして、受け入れてくださるPTA・クラス・クラブのご理解、ご協力で裏付けられてのことである。次の章で、今年度の留学生の具体的な留学生の活躍ぶりに触れたい。

―受け入れ留学生の活躍

留学生が一番活躍した授業は、英語オーラルコミュニケーションであった。発音のお手本を示すだけでなく、オーストラリアの文化を生徒達に伝えてくれた。例えば、クリスマスについて学んだ時には、次のような事実を生徒は目を丸くして驚いていた。「プレゼントは一人30個ももらう」「クリスマスケーキはない」「ビーチか庭のプールサイドでBBQをして祝う」「家族パーティーは30人規模を母方と父方に分けて2回行う」など。また別の機会には、姉妹校にCCGSの様子について、校則や



生徒会、4つのハウスカラー対抗戦があることなどを発表してくれ、生徒達は大いに刺激を受けていた。また今年度の留学生はフットサル部・バスケットボール部・テニス部に入り活動した。部員に聞くと、「オーストラリア流のトレーニングメニューを教えてもらって一緒に試した。」「冬でもなぜか薄着で、純粹にプレイを楽しむ留学生の姿は、部活のイメージ「忍耐」を一掃してしまうパワーがあった。」「などと感想を話してくれた。クラスや部活動の面でも新しい風を学校に吹き込んでくれた。次の章では、日本の学生と留学生を比較し気づいたことをいくつかを紹介したい。

―受け入れ留学生の様子

・プレゼンテーション能力・意識・技術の高さ

CCGSの生徒達には、高いプレゼンテーション能力がある。全校集会での発表の準備では、目的を問われた以外は、「私たちのプレゼンだから、先生は心配しなくても大丈夫」と言われた。内容はカルチャーショックをコメディイ仕立てで見せるビデオを作成、自分達のマックコンピューターで動画を切り貼りし音をつけ、あっという間に編集していた。西高生にも大受けであった。二年生の留学生グループには、CCGS紹介のパワーポイントを作ってもらったが、やはり六人で意見を出し合い、セリフも日本語で作り、全てを一晚で仕上げたものには驚かされた。CCGSのIT教育の賜物であると感じた。西高生も大いに感化されて欲しい部分である。

・感情表現の豊かさ、精神的成熟度

楽しいこと、嬉しいことは、大喜びで大騒ぎする留学生。毎日の嬉しかった出来事を共有しては盛り上がりがあった。そして興味のある異性についても、



実にオープンに話題にしていた。「思春期の恥じらい」はあまり感じられなかったし、男女グループの境界線もないようだ。一方、15〜16歳でも、大人と対等に会話を楽しむことができる。日本の感覚で言うと、精神的には幼く感じる半面、大人びてもいる。ある留学生を受け入れた日本のお母さんはこんなことを言っていた。「いわゆる思春期が全然感じられないんですよ。男の子なんですけど、段差のある所で自然とお母さんの手を引いてくれるような、やさしい気遣いをしてくれるんです。どうやったらこんな風に育つのでしょうか。」いつか、日本の十代もこんな風になら変わっていくのだろうか…。最後に、最新の留学生事情に触れたい。

―留学生の今・昔

一昔前、留学するには、家族や友人と離れ、異国で暮らす相当な覚悟が必要であったし、送り出す方もそれなりであったと思う。それは、簡単に連絡を

取り合うことができなかつたからだ。しかし今の留学生は違う。世界の端と端でもインターネットのスカイプ（テレビ電話）で家族の顔を見ながら、好きなだけ話ができる。フェイスブックに自分の異文化生活の様子を写真（画像）やビデオ（動画）でアップすることで、学校の友人達からコメントが寄せられたり、チャットをしたり…。無料なのでとても気軽にできてしまう。このことよって、留学への抵抗感が小さくなったのは大変良いことなのだが、ある意味孤独であるべき留学中に、自国とのつながりが過度に持ち込まれるのは良し悪しだ。簡単に連絡が取れるのはいいが、留学先で問題があった場合、事情のわからない第三者が介入すると余計ややくしなったりもする。しかし、時代の流れには逆らえないので、最近はその状況を逆利用。例えばテレビ電話をするなら、留学生のホストファミリーにも登場してもらい、家族同士が知り合って信頼関係を築



いてもらえるように考えたり、フェイスブックからは楽しい異文化体験をたくさん発信してもらえよう、私達もカメラを離さずカメラマンに徹したり。進化する留学スタイルについていこうと、係も奮闘しているのである。

―まとめと今後の課題

留学センターに留学生在がいる間、毎日がとてもぎやかで新しい発見・学びがあった。また、多くの西高生、ファミリー、先生方が関わってくれて、留學生達も安心してのびのびと生活している姿が印象的であった。

今回は受け入れ留學生の話を中心に報告させていただきましたが、派遣留學生としては、現在CCGSに三名が長期留學生中であり、また今月末には十五名の生徒が春休みを利用して短期留學生する。CCGS、

本校ともに留学リピーターが増え、彼らが行き来するたびに交流の輪が広がっているようで喜ばしく思っている。

今後の展望としては、まず今あるCCGSとの交流を大切に、更に発展・充実させること。そして中国の姉妹校、天津二中との交流も同様に前進させること。また、オーストラリア、中国にとられず、世界の多くの国々との交流へとへと視野を広げていくこと、の三点であろう。係としては、何よりも西高PTAの皆様の協力体制に心から感謝し、さらなる西高の国際教育の発展を目指していきたいと思っている。

終わりに、今年度のCCGS留學生ロジャー・リーくん（17歳）が、日本語でメッセージを寄せてくれたので披露したい。

《ロジャーの感想文》

はじめまして。僕はロジャー・リーです。17歳で、オーストラリアの学校に通っています。上田西高校に2回目の留学をしました。留学の間とても楽しかった。毎日、新しいことを習って、毎日おもしろい。

上田西の特別ないい点は留学の機会があることだと思います。留学で、僕は日本の生活や文化や言語を学びました。それと、それだけじゃなくて、もっと僕はもっと自信をもち、自立した人になりました。このようなことは、将来にとっても大事だと思います。

上田西の生徒も外国へ留学する機会があります。2週間、西高生がオーストラリアに行って僕の学校（CCGSという名前）に留学します。学校で英語の授業をして、オーストラリアの学校生活に参加して、TARONGA 動物園に行って、海ノビーチでサーフィン・レッスンをやってみて、すごく楽しそう。

僕は留学して、すばらしい思い出がいっぱいできた。初めて、日本にておみそかを経験して、お寺にお祈りをして興味深かった。さらに、小諸の道祖神の祭りを見て、太鼓をやって楽しかった。ホーストファミリーで、お姉さんが成人式で、きものをきたり、伝統的な習慣を見せてくれたが、オーストラリアで、教科書で習ったことと関連していて、とても興味深かった。実際に見られてよかった。僕の成人式も、日本でやりたかった。

僕は外国で生活することで、新しい友達をたくさん作ったことと同時に、新しい自分に出会うことができました。だからみなさんも留学にチャレンジしてください。

進路指導の取り組み

キャリア教育と進路実績の分析

1. キャリア教育の取り組み

上田西高校進路指導係では、ここ数年キャリア教育に力を入れて取り組んでいる。昨今の就職環境の悪化（離職率の増加、就職率の低下、非正規雇用の増加）は、生徒たちの将来の大きな不安となっている。そのような社会情勢において、従来以上に、職業観を育成し、自分がどの様に働きたいかの様にこの社会で生きていくべきかというビジョンを持つことが生徒にとって大切になってきている。この情勢を受け、本校では生徒たちのキャリア意識の育成を第一に考え、進路指導を実践している。

〔マインドマップの受験〕（1年／4月）

与えられた情報や自身の頭を図に示して整理する、マインドマップの講義と実践を行った。「考える」という行為を「無秩序」に行うのではなく、一定のルールのもと整理することができる、自分の考える力を飛躍的に向上させることに気付かせ、自分の学習や将来といった、漠然としかとらえられないものを、より明確に捕らえることができるようになるのではないかと考え実施した。

〔RI-CAPPの活用〕（1・2年／通年）

RI-CAPPとは、自分の適正をもとに将来の進路について考えるプログラムである。職業・学問の適合度ランキングや仕事・学問カタログを見ながら、仕事や学問への理解を深め、将来なりたい職業、その職業に就くために学ぶ学問、進学先の学部・学科やその後のキャリアを描くためのものである。

1年生は適性検査をもとに「職業調べ」や「高校

時代に取り組むこと」「学問適性から文理選択を考える」を実施。自分の将来像や、その目的を実現するための具体的な方法を学習した。

2年生は昨年度からのひき続きの実施で、「仕事をもとにした学問調べ」「学部学科調べ」を行った。生徒たちは、具体的な方向性を決定していく手がかかりを得ることができ、3年生にむけて、さらに進路実現に向けて目標が明確になった。その明確な目標をもとに、3学期には「自己紹介履歴書の作成」「志願理由書の作成」の実施を予定している。

〔キャリアガイダンス〕（1年／10月、2年／9月）

1年生は18の業種について、関連の大学・短大・専門学校より講師を招き、職業ガイダンスを実施した。それまで漠然と捉えていた「職業に就く」ということに対して、具体的なイメージがもてた。2年生は大学・短大・専門学校の講師を招き、実際に進学した時の様子をじかに触れるということで、模擬授業を実施。自分が目指すところが本当に自分にとって必要としている学習ができるのかといった具体的な目標設定のためのいい経験となった。

この他にも、「卒業生の声」ということで、上田西高校で学び自分の目標を達成していった卒業生から話を聞き、自分の進路実現のために今必要なことはどういうことかを学ぶ会を予定している。

そして、1・2年生までのとり組みをもとに、3年生では具体的な進路実現へとすすんでいく。

2. 進路指導の取り組み

Ⅱ類を中心に本校では、高い目標を持ち国公立大学および私立難関大学を目指し学ぶ生徒たちに即し、カリキュラム及び諸行事に工夫がなされている。

Ⅱ類の7時限目の「演習」授業や、代々木ゼミナールの衛星放送によるサテライト授業（英語・数学）。春期・夏期・勉強合宿・土曜補習などは、基本的にⅡ類は必須とし、Ⅰ類でも希望制で実施している。これらの行事は、確かな力と自学自習の態度を身につけさせている。

各担任によるきめ細かい指導も、大きく生徒の今後に反映している。「日々の学習記録」をつけることで学習習慣を確立させたり、年に5回前後行われる個人面談により進路の方向性とやる気を確認したり、ただ勉強させるだけでなく、自分の将来を見据えた学習を心掛けさせることで、大学の先にも目を向けさせるようにしている。

3年生においては自分の目標を達成するためのより実践的な進路指導が行われている。年間13回におよぶ模擬試験は入試本番を意識し、全国における自分の力を知り、実力養成のきっかけとしている。また、この活動は、試験の習慣化も目的としており、センター試験の感想では「模試と同じように受けられたので緊張しなかった」といった声も聞かれた。センター試験直前の11月末からは、受験に向けて「特別編成授業」が行われ、集中して受験科目の学習に専念することができた。

3. 本年度の実績

本校が、Ⅰ・Ⅱ類体制になって今年で8年目である。その間さまざまな試みが実践され、また毎年改

平成22年度 進路合格実績一覧 (2月14日現在)

〔四年制大学 (国公立)〕

大学名	人数
高知大学	1
信州大学	3
筑波大学	1
新潟大学	1
山口大学	1
都留文科大学	1
合 計	8

〔四年制大学 (私立)〕

大学名	人数
跡見学園女子大学	1
桜美林大学	3
大谷大学	1
大妻女子大学	1
神奈川工科大学	1
神奈川大学	2
金沢工業大学	1
関東学院大学	1
桐生大学	2
群馬バース大学	1
健康科学大学	1
国際武道大学	1
国士舘大学	3
駒沢女子大学	1
佐久大学	2
城西大学	3
尚美学園大学	1
上武大学	1
女子美術大学	1
鈴鹿医療科学大学	1
駿河台大学	3
聖徳大学	2
高崎健康福祉大学	1
宝塚大学	1
拓殖大学	1
千葉工業大学	2

千葉商科大学	1
帝京科学大学	1
帝京大学	1
東海大学	3
東京経済大学	1
東京工科大学	1
東京工科大学	2
東京福祉大学	2
同志社大学	1
東洋大学	2
長野大学	3
名古屋外国語大学	1
名古屋商科大学	1
新潟医療福祉大学	1
新潟リハビリテーション大学	1
日本経済大学	1
日本女子体育大学	1
日本大学	4
日本保健医療大学	1
広島国際大学	1
文化女子大学	2
文教大学	2
法政大学	(1)
松本大学	2
ヤマザキ学園大学	1
山梨学院大学	5
立命館大学	(1)
立正大学	1
和光大学	1
合 計	83(2)

〔短期大学〕

学校名	人数
飯田女子短期大学	1
上田女子短期大学	3
埼玉女子短期大学	1
清泉女学院短期大学	1
洗足こども短期大学	1

高崎商科大学短期大学部	1
実践女子短期大学部	1
合 計	9

〔専門学校〕

学校名	人数
ESPミュージカルアカデミー	1
JAPANサッカーカレッジ	3
OKA学園	1
上田医療衛生専門学校	1
上田敬愛学院	1
上田情報ビジネス専門学校	5
エブソン情報科学専門学校	1
大原学園専門学校	1
大原スポーツ公務員専門学校	1
学校法人 専門学校 HAL 東京	1
北里大学保健衛生専門学院	2
群馬自動車大学校	1
国際文化理容美容専門学校	2
国際ホテルブライダル専門学校	1
国際理容美容専門学校	1
埼玉医療福祉専門学校	2
佐久総合病院看護専門学校	1
松本医療福祉専門学校	3
東京愛犬専門学校	2
東京エトラベル・ホテル専門学校	2
東京観光専門学校	1
東京ビジュアルアーツ専門学校	1
東京ビューティアート専門学校	1
東京メディカルスポーツ専門学校	1
トヨタ名古屋自動車大学校	1
長野医療衛生専門学校	1
長野カレッジオブキャリア	1
長野医療専門学校	3
長野美術専門学校	2
長野病院附属看護学校	1
長野救命医療専門学校	4
長野理容美容専門学校	1
日本アニメマンガ専門学校	1

日本医科大学学校	1
日本外国語専門学校	2
日本工学院 医療専門学校	1
日本工学院 八王子専門学校	3
華調理師専門学校	1
晴陵リハビリテーション学院	1
ウィーンズ・アカデミー	2
文化服装学院	1
前橋医療福祉専門学校	7
山野美容専門学校	3
臨床福祉専門学校	1
合 計	74

〔就職〕

会社名	人数
イエローウィッシュ	1
株式会社 東京ピク足場	1
社会福祉法人 聖会特別養護老人ホーム	1
新光電気工業 株式会社	2
日本産産パンキョー	1
美容室 アース	1
松田・南信(株)	1
有限会社 アートランド	1
臨泉楼 柏屋別荘	1
合 計	10

良されながら続けられている。その中で、着実に生徒の力も向上してきている。例えば、国立大学への合格者数も年々増加しており、今年もすでに8名の生徒が合格している。また、離れ私立にも多くの生徒が合格している。平均点も多くの教科で毎年向上しており、各

上田西高校 国公立大学合格実績

人数	主な大学
平成19年度卒業生 3(2)	横浜国立大学 信州大学 群馬大学 都留文科大学
平成20年度卒業生 8(3)	信州大学 新潟大学 青森公立大学 高崎経済大学 都留文科大学 前橋工科大学
平成21年度卒業生 14(5)	茨城大学 金沢大学 群馬大学 高知大学 埼玉大学 静岡大学 島根大学 信州大学 新潟大学 高崎経済大学 新潟県立大学
平成22年度卒業生 8	高知大学 信州大学 筑波大学 新潟大学 山口大学 都留文科大学

* () 内は過年度生の合格者数

*平成22年度卒業生は2月14日現在の合格者数

平成23年3月

上田西高の教育 第55号

発行 上田西高等学校

上田市下塩尻八六八

http://www/uedanshi.ed.jp

TEL 0268-22-0412

教科による着実な学力向上の取り組みが実を結んでいるといえる。

また本校では、就職を選択する生徒に対しても、手厚い指導を心がけている。本年度は、この不況の中昨年度より多い10名の内定が決まっている。事業所見学の際のマナー指導など、ひとつひとつのことを大切にさせ、その姿勢が近隣企業から強い信頼を受ける要因となっている。

上田西高校では、一人一人の進路を大切に、すべての生徒がよりよい社会人になるように、進路指導を実践している。

編集後記

『西高の教育』100号は？

創立50周年の記念行事・事業はグリーンアリーナ(第2体育館・表紙)の完成とともに無事終了することができました。また55号を迎えたこの『西高の教育』を紐解くと、50年間の本校教育実践が一目瞭然となります。

さて、本冊子100号は一体どのような内容の教育実践報告がなされるのか今から楽しみです。西高は新たなスタートを切りました。